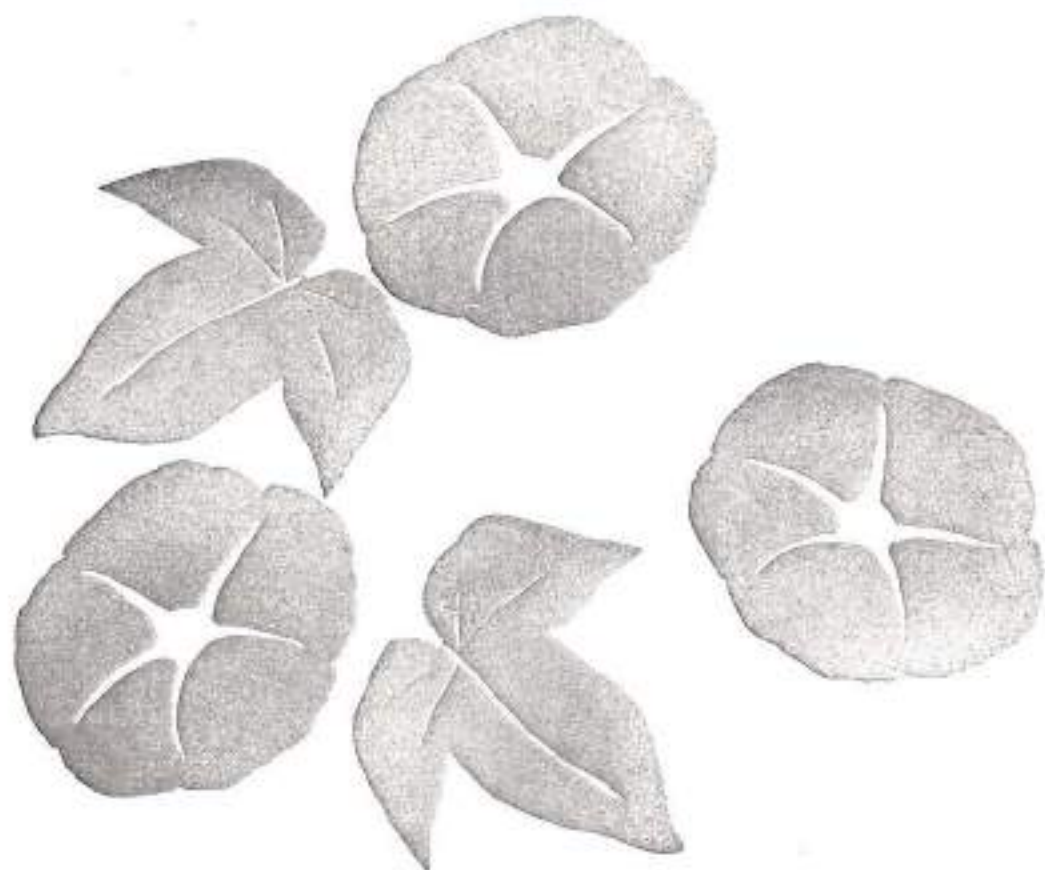


Interpreter Workshop

vol. 37



府民の森パークレンジャー 2009

今回の IPWS 37号は

「花」をテーマに綴っていただきました

もくじ

17 期	松本 修子
16 期	藪野 昭宏
16 期	鎗山 清隆
16 期	畑中 操代
10 期	武田 敏文
12 期	峻 亘
14 期	上口 博司
12 期	下釜 恭道
12 期	安田 芳宏
2 期	西出 明子
co	富田 亜希

花のWEB

はじめまして。17期の松本です。4月に研修が始まって、最初に教えて頂いたのが、ウラシマソウでした。初めて見る長い糸状のものや、花の咲き方、名前の由来に興味を惹かれた。その後の研修や、園地でのイベントでも今まで見たことのなかった花や、何年ぶりに見るんやろうというような花。

通勤途中でも、今までただ通り過ぎていた道や、園地の片隅に咲いている花などにも、目が奪われる日が続いたり、意識する・しないで、普段何気なく見ている風景も、全然違って見えてくることに、あらためて気づいたりして、嬉しくなったりした。又、どれだけの花があって、それぞれの名前や特徴など、勉強することの多さに少し気後れすることも・・・

今は夏、週一回程行く施設のフェンスに、蔓を伸ばして朝顔の花が咲いている。そう言えば、小学校に入学して、最初に行なった自然観察が、朝顔だったことを思い出す。学校で種をもらい、家の植木鉢に蒔き、毎日水をやり、双葉が出てきた時の嬉しかったこと。本葉が出てきて、植え替えをした後もすくすくと育ち、蔓はあっという間にどんどん伸びて、いつの間にか2階のベランダに到達していたこと。忘れかけていた記憶が少しずつ、蘇ってくる。さすがに花の色までは、覚えていないが、たぶん青色だったような気がする。夏休みの宿題に観察日誌を書いたり、絵日記に描いたり、友達の朝顔と成長度合いを比べあったり、毎朝ドキドキしながら、水やり・観察をしたものだ。

これから、レンジャーとして活動していく中で、いろいろな花々と出会い、観察することになると思うが、あの頃の純粋な気持ち&キラキラ輝く眼差しで、楽しみながら、見つめていきたい。

「花と蝶」

「花が女か、男が蝶か」・・・森進一の歌、作詞家、川内康範の詩の1番の最初です。

続く2番の、最初のフレーズは・・・

「花が咲くとき、蝶が飛ぶ」・・・このフレーズの方が、今回のお話には、近いかも！

ヨツバ ヒヨドリバナ(キク科) / クガイソウ(ゴマノハグサ科)

これらの花の名前を聞いて、何をイメージされますか？

私は、今年の春まで、これらの花の名前も、どんな姿の花なのかも、知りませんでした。

「渡り蝶」って聞いたことがありますか？

遠く、南の島、喜界島などから、海を渡って、2000Km 以上も、「旅をする蝶」・・・

アサギマダラ???? この名前も、「タテハチョウ科」の蝶であることも、私は、何一つ知りませんでした。

ちはや班・上ロリーダーのお話では、金剛山に、夏になると「アサギマダラ」とゆう・・・ふわふわと、優雅に飛び回る、綺麗な蝶が、沢山来るとのことでした。

「どんな蝶なのか？」この疑問と興味が、出会いのスタートでした。

そして、「アサギマダラ・海を渡る蝶の謎」とゆう本と出会い、色々なことを、知りました。

この蝶は、20℃前後の気温を好み、5~6月ごろ南の島、喜界島などから、北上し、海を渡って、北は宮城県くらいまで、涼しさと、好みの花、最適な産卵場所などを求めて、やって来るのだらうと、言われています。また、秋になると、南下し、9~10月ごろ、近畿を通り、南の島に飛ぶ蝶を、見ることが出来るそうです。

大変、ロマンあふれる話だと思いました。

しかし、今年は、異常気象のためか、昨年とは比較にならないくらい、金剛山への飛来が少なく、私は、興味を抱いた・・・いや、恋する?・・・アサギマダラには、会えませんでした。..

こんなことで、蝶を求めて、この夏は、信州へ.....

高山植物や、山野草の豊富な、高峰高原へ旅する、シニアとなりました。

「恋の成就には、スチュエーションが大切！」ですね。.....会えました！！

沢山の花と、アサギマダラに！

そして、ゆくり、秘湯の宿・高峰温泉に3日間浸ってきました。

アサギマダラさん、来年の、「金剛山夏まつり」には、この読者さんと会いましょう！

モミジの花

16期生 鮎山 清隆

秋には燃えるような赤や黄色に色付く葉っぱ、紅葉の季節がやってくる。

緑の葉っぱが、何で秋になると、赤くなり、黄色くなるのだろうか？

詳しい事を知ることもなく、秋には紅葉を楽しみ、紅葉狩りと称してモミジを鑑賞する季節だとしか思っていなかった。

でも、モミジの木も、花を咲かせることを、今年になって初めて知った。

春、新緑の季節に、さりげなく小さな赤い花を、葉っぱの下に咲かせるモミジ、気付かなかった。

教えてもらって初めて、モミジの花を見ることができた。

小さい、小さい、本当に小さな赤い花が、緑の下に所狭しと咲いている。

夏の時期に、実が成長して、モミジの木から飛び立つ準備を完了するかのようになり、種が大きく育った状態になっている。

花を咲かせて実をつけて種を産む。

自然のサイクルを改めて感じた。

木にも花が咲くんだ。

自分の意識のなかで、このことに思いをはせたことなど今まで無かったなあ。

考えてみると、春には、梅、桃、桜の木に花が咲く。

春が来た、花見だ、酒だ、ワッショイワッショイ。

ただきれいなものを見て、その下でお酒を飲んで、みんなで楽しむ楽しみ方しか、私は、知らなかった。そして木に花が咲いている事を無自覚に見ていた。

花といえば、草花を思い出す。

きれいな花が咲いているものしか目に入らなかった。

それさえも目に入っていたかどうか疑わしい生活を今まで送ってきたなあ。

パークレンジャーに参加して自分の意識が大きく変化した事を感じる。

普段何気ない生活の中で、自然を意識して過ごすことなど今までそれほど無かったんだ。

当たり前のように、四季が訪れ、日本には、季節感を感じさせてくれる変化があるのに、自分の生活のなかで、季節感をどれだけ感じて生活しているのだろうか？

モミジの赤い小さな花は、強く自分の中に、木にも花が咲く、気付かれないところで、生きていく証を確実に示しているのに、自分が、気付かないだけであることを教えてくれた。

これからは、ゆるゆると身近なものに目を向けて行きたい。

16期生の花田です

私の好きな花は初春の咲くすみれと初秋の咲くマリーゴールドです
花屋さんの店先に色とりどりのすみれやマリーゴールドが並んでいて
私は山の中に咲いているすみれやマリーゴールドが大好きです

ハーブ・レニバーに付いて5ヶ月 何か何か一人前になる
何かをせんとか何かに付いて行きたいと思っております

中部学院の最大イベント 及びお祭りなどが今度
6月28日(日)に開催され 85人の参加者がありました
天候のせいもあり、人数が少し減った感じがしますが
物足りなさは感じません

1500坪のガーデンに25,000株のあじさいが咲き
日暮原産は少なくほとんどの西洋種との交配種と
教わりました 花の色も今更には見えないのは
実は花弁が小さく「かたじけなく」と 花の中の中心に咲いている
のが「花びら」といって「かたじけなく」(?)

花好きの人たちから知ることが多いのも
知ることがあるから「すみれ」は
少くとも覚えて 参加した方には
紹介出来たいと思っております

中部学院
森林整備課 に所属しております



「サビタ」の花

10期 武田敏文

今回のテーマは花と言うことで、花はどうして「はな」と呼ぶようになったのか、その由来を調べてみた。

- 1) 花は植物の先端部分につくので「端(はな)」
- 2) 「葉(は)」に捲尾辞の「な」がついて「はな」
- 3) 開くと言う意味の「放つ」から「はな」
- 4) 「早生(はやくなる)」から「はな」
- 5) 「春成(はるなる)」から「はな」

もっともらしい説は上の 1) か 2) のように思われるが、それにしても「花」と言う字は草が姿を変えと言うので草冠に化けると書くのは言い得て妙、なるほどと思う。

ところで皆さん、「サビタ」の花をご存知だろうか。初めて聞くと言う方も多いと思うが、「サビタ」は「ノリウツギ」のことでアジサイの仲間。北海道で良く知られているらしい。むかし東北地方から北海道の開拓に移住した人たちによって名づけられたと言い、岩手、秋田や青森には方言で「サビタ」、「サブタ」、「サンビタ」、「サンブタ」があると言う。ノリウツギは府民の森にも見られ、かなりの高木になる。花はアジサイに良く似ていて、全体が白い花でふさ状になって咲き、装飾花(ガク片)数枚が下部につき、本当の花は小さく中央について密生する。またノリウツギは和名で「糊空木」と書き、内樹皮に含まれる粘液が和紙を漉(す)く時のつなぎ剤として使われたのはよく知られている。

さて、花は美しいもの、はかないもの、また時には人の心を惑わすようなものとして詩歌や物語によくでてくる。「サビタ」は俳句の季語で「花さびた」としてよく読まれるが、語感から来るイメージは美しいが何となく淋しい感じを受ける。そんな「サビタ」にまつわる昔話がある。

ある村の若者から恋心を打ち明けられた美しい乙女がいた。乙女は「このサビタの花が散るときがきたら…」と返事した。若者は燃える思いで待ち焦がれた。しかし、花は枯れ果ても落ちず残ったままだった。そして恋は実らなかった。これはアジサイの花と同様、「サビタ」の装飾花は綺麗で目立つが実を結ばない、そして冬になってもドライフラワーになって枯れずに残る。それと知らずに待ち続けた若者。何とも悲しい酷な結末である。

もう一つの話は、北海道出身の作家「原田康子」のデビュー作「サビタの記憶」と言う短編小説である。ストーリーは、病弱な女学生が母の勧めで温泉に保養しに来た。そこで同宿していた年上の男と知り合いになる。男はいつも部屋で本を読んでいて、そして女学生はその男に淡い思いを抱くようになった。ある日、男は散歩の途中で白い花を見つけ彼女に手折って渡した。「なんて花?」、「サビタ…」と男は答えた。そして「サビタの花が散る時に…」と言った。それから暫くして突然官憲が温泉宿に踏み込んできた。男は思想家だった。二人に別れが訪れたことは言うまでも無い。多感な女学生の一夏の淡い記憶、と言う内容である。

「サビタの記憶」は昔話をモチーフにしているのではないかと思うのだが、それにしても昔話の乙女や、「サビタの記憶」の男は最初からこの花がいつまでも散らないことを知っていたのだろうか。もし、そうだとすると、彼らは結末を分かっている返事をしたと言うことでチョッと恐い人たちだと言う気がする。花は、やはり綺麗で怪しいところに魅力があるものらしい。

さて皆さんはこの「サビタ」の話、どのように感じられただろうか。ノリウツギの説明に「サビタ」の話をする機会があったら、お客さんはどんな反応を示してくれるか聞いてみようと思う。

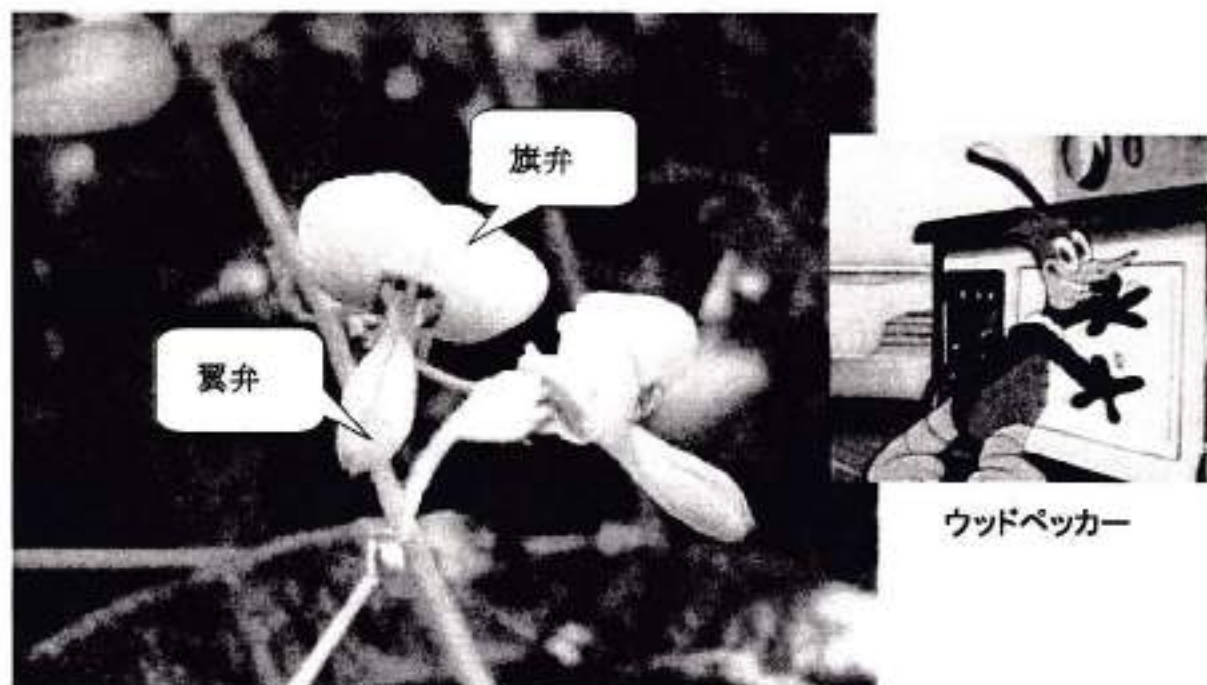
尚、サビタの花は、暑い夏が見頃である。



サビタの花

ウッドペッカーそっくり アレチヌスピトハギの花

北部版 12期PR 峻 亘



アレチヌスピトハギ(マメ科) くらんど園地 (19年9月16日)

アレチヌスピトハギは北米原産の帰化植物。高さ1m程になる多年草。路傍や造成地などの荒れ地に生育し、次第に増えている。葉は3小葉からなり、葉の下面、茎や花軸に毛が多く、全体的に毛が目立つ植物である。9月頃から長さ6~9mmの美しいピンク色の花を咲かせる。果実は扁平であり、3~6に分かれ、間には節がある。表面はかぎ状に曲がった毛が密生しており、熟すと節から分断されて衣服などにひっつく。気づかずに荒れ地を歩くと、びっしりとくっついてしまうやっかいな引っ付き虫である。花は以前TVで見たことがあるウッドペッカーに似ていて面白い。

写真の花の旗弁と呼ばれる花弁の両目の付け根部分を先のとがった棒で押すと下の2枚の翼弁が開き糸状の雄蕊と雌蕊が飛び出す。これはハナバチが蜜を吸いに来たときに雄蕊の花粉をたたきつけるための構造である。マメ科に多い蝶形花にみられる特徴で星田園地のエニシダやホオベニエニシダでも確認できており、ガイドウォークの目玉商品である。

名前の由来であるが、在来種のヌスピトハギの実の形が、つま先歩きをした盗人の足跡に似ているためにヌスピトハギ(盗人萩)と命名されたという説がある。アレチヌスピトハギはヌスピトハギに似ているのでこの名前がつけられたが、ヌスピトハギの実はふくらみが2つなのに、アレチヌスピトハギはふくらみが3以上なので足跡には見えないという人もいる。

テーマ：花

14期 ちはや班 上口博司

ちはや園地で活動して3年が経ちました。

この園地では春先にカタクリが咲きます。最初に見たときには下向きに咲いて花びらは反り返っていて変わった花だなと思ったくらいでした。

花にはタネから芽を出して咲かせるまでに短いものがあれば、長いものまであります。

カタクリは7年～9年で花を咲かせることを教えてもらいました。

自分でも調べてみたら最初の1年は糸のような葉っぱを1ヶ月程度出して枯れるようです。その時に地下の鱗茎に養分が蓄えられます。

(昔はこの鱗茎から片栗粉がつくられていました)

次の年には小さな本葉を1枚だけつけて、枯れるときに養分を鱗茎に蓄えます。

これを繰り返して、年がたつにつれて葉が大きくなっていきます。

そして、ようやく花を咲かすときには葉っぱを2枚つけて咲かせることを知りました。

これを知って次に園地へ行ったときはすでに花はありませんでした。

翌年、待ちに待ったカタクリをみたら愛おしく思えてきました。

そんなに年月をかけてようやく咲いているのかと思うと「ごくろうさん」と声をかけていました。

このように早くこの花が見てみたいとかだんだん好きになっていく花がふえていくことは自分自身ですごく楽しみながら活動しています。

インタープリターとして園地に来られた方がまたこの人の話を聞いてみたいと思ってもらうことが目標でありそれを一人前とするならばカタクリのように時間がかかっても一人前になろうと頑張っています。

パークレンジャーという栄養素の高い…過ぎる!?土壌で1年、また1年と大きな葉っぱをつけていって変な花になろうと一目置かれるような花を咲かせることを目標にレンジャー活動をやっていきたいと思います。

書家・詩人であった相田みつをにこんな詩がある。

「花には人間のような かけひきがないからいい
ただ咲いて ただ散って ゆくからいい
ただになれない 人間のわたし」

実はこれ、相田みつをの「トイレ用ひめくり ひとりしずか」に収められた一篇なのだが、いつも便座にゆっくり座りながら、パークレンジャーの一員としては、どうしても引っかかってしまう。

「…花にも駆け引きってあるよね？」

ということで、ちはや園地に咲く花を例に花の駆け引きの話をしてみよう。

ちはやの春の花と言え、やはり「カタクリ」。標高の高いちはやの春は遅く、街で暖かくなる4月でも少し肌寒い。カタクリは、ブナやミズナラの木々がまだ葉を広げていないその時期にピンク色の花を下向きに咲かせる。その姿は実に可憐で、「スプリング・エフェメラル（春の妖精）」と呼ばれているのもうなずけるが、その下向きに咲く姿が虫との駆け引きを体現している。蜜を求めてやってくるハチやチョウは、カタクリの花びらが大きく後ろに反りかえっているためつかまることができず、思わず花の奥から突き出した雄しべと雌しべの束にとまる。そこで受粉が確実に行われることになり、つまり、花の構造自体が受粉を確実にを行うための仕掛けになっている。さらに、カタクリの花は、気温が低かったり、雨が降ったりすると花を閉じてしまう。というのは、ハチやチョウは、気温が低いとやってこない。花はこの習性を知っているかのように気温が17℃以上になると花を開き、それ以下だと蕾のように閉じてしまう周到さである。これを駆け引きと言わずしてなんと言おうか。

次にちはやの5月の主役、「マムシグサ」。マムシグサというのは、マムシが鎌首をあげたような形の花を咲かせる植物の総称で、この花の場合、駆け引きというより、「罠」を張っていると言った方がいいかもしれない。犠牲者は、小さなハエ。マムシグサには、性別があり、まずハエは、匂いに引き寄せられて、オスの花の中へと入っていく。ところが、つぼ状の花の内部はツルツルで足がかりがなく、また下からは忍者返しのような仕組みがあって、上に戻ることはできない。唯一の脱出口は、花の底の部分あり、ハエは花粉まみれになってほうほうの体で逃げ出す。だが、恐ろしいのは、マムシグサのメスだ。花粉まみれになったハエの1匹が、今度はメスの花に入っていく。当然こちらもツルツルで、ハエがなんとか出口を見出そうともがきまわるうちに、体につけてきた花粉が雌しべに付着し、受粉が完了する。しかし、このメスの花には、出口がない。受粉を確実にを行うため、出口を設けていないのだ。憐れハエは、飢えと渇きのために死んでしまう。実際、マムシグサのメスの花を開いてみると、死んだハエがたくさん入っている。これを罠と言わずしてなんと言おうか！

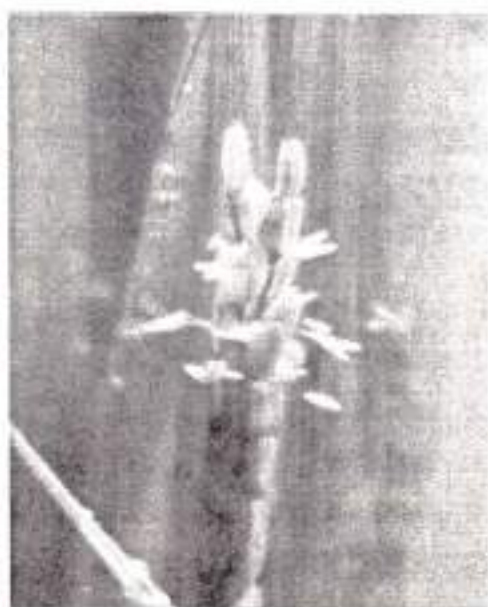
これらは、花と虫の駆け引きのほんの一例だが、こういった花と虫の不思議な関係がガイドウォークのネタになる。ちはや班では、春と秋の季節にガイドウォークのイベントを行っている。参加者の多くはファミリーで特別植物に興味がある人たちではないのだが、ガイドウォークが終わると、これまでなにげなく見ていた花にそんな秘密が隠されていたことに驚き、ちょっと自然を見る目が変わったとのうれしい感想を聞かせてくれる。これぞパークレンジャーの醍醐味である。今年の研修生でガイドウォークをやりたいという人は、ぜひちはや班に加わってもらいたい。持っています！

Flower 花

小さな女の子たちに、「大人になったら、何になりたい？」って
聞いて見ると、必ず、数人の子は、「花屋さん」って答えがかえってくる
そして、「どうして花屋さんになりたいの？」って尋ねてみると、
「きれいだから！」「お花がいっぱいあるから！」って答えが返ってくる
人生に花は、切っても切り離せないものなのですよね！人が誕生してから
人生最後の瞬間までの日・・・人生の節目節目に、必ず側にあるのが「花」
では、みなさん、世界には、何種類位の花があるかご存知ですか？
そのうち日本には？・・・世界には約数十億～数百億種類とされていますよ
日本では、数億種類の花々が・・・？？？なぜ数・数十・数百なの？世界中には、
多くの花が今も、新たに品種改良がなされ市場に出荷されています。
花は、その昔しから、歌や俳句や和歌などにも出てきます、又、人が誕生する以前から
地球には、花は、存在しましたよね。地球で一番始めたの花、みなさんもお知の
「シダ」ですよね、2億5000万年前の恐竜の胃袋の中からシダの化石が・・・
私たちの活動している山々にも、シダや多くの花の原種が残っていますよね
ちなみに、みなさんは、パンジーと言うお花はご存知ですか？近くの公園や花壇
なんかによく咲いていますよね、あの「パンジー」の原種は、「すみれ」ですよね
園地にも、まだまだ、残っていますよね・・・
花は、無数の色合いや形・咲き方さまざまですわ、又、青空を見上げて咲く花
横を向いて咲く花・はすかしそうにうつむき、下を向いて咲く花、一夜だけしか
咲かない花、咲き方もさまざまです、でも、これも一つ一つすべて理由があるのですよ・・・
ちいさな子ども達の夢、人生の節目に用いられる花、みんな、人の生活に描いても
かかせない花・・・うっかり見落としがちな小さな花・・・私たちが活動して行く中で
そんな原種の花も私たちが注意し、次の世代に残していかなければいけない用に思っていますね

BOSS

みなさん下の3枚の写真の「花」なんだかわかりますか？？？



野の花あそび

生まれてから30年近く過ごした実家は大阪市内。最寄駅は京橋でした。「野原」ってどんな光景なのか、テレビで眺めて知っている程度の子供。どんなものが「野の花」なのかよくわかりませんでした。

何かの本で見た「花かんむり」。

たしかシロツメクサの茎を編んで作っていたものでした。

…無いよ。そんなにたくさんのシロツメクサ。砂利を敷いた駐車場の端にへばりついていたシロツメクサは茎が短く数も少なく、束ねることなんて到底できなかった。それでも茎を割って差し込んで指輪にして遊んだっけ。



これも本で見た「花ずもう」だったか。

スミレの花のうつむいた茎をからめて花を落とされた方が負けだったような。

…無いよ。スミレ。バンジーって三色スミレっていうと思うけど、だからって鉢植えのバンジーをちぎって遊ぶなんてできないよ。

オオバコなら生えていた。茎をからめてちぎれたら負け。それはやった。

今になってよくよく考えたらあれも花だったんだなあ。



「花占い」好き・嫌い…って花びらをちぎっていくアレですね。

摘んで遊んで咎められることのない花って…なかなか無いよね。

カタバミはあったけど子供の指でもちぎりにくい小ささ。だいたい見たらどっちで終わるか一目瞭然。つまんなーい。

結局タンポポ？一度に何枚か一緒に引き抜いてしまうので訳わからなくなってやめてしまったか…自分の都合のいいところで止めたかも。

そんな訳で結局「野の花あそび」ではなく朝顔やひまわりやチューリップなど、家で育てた花で色水遊びやおままごとをしていた子供の頃の私でした。

まさか大人になって、今になって「野の花あそび」をしているなんて。

散歩の途中に道端の雑草たちに咲いている花をみつけてじっくり眺める、今の私にはこれが充分なあそび。「野原」とまではいなくても。

本に書かれていたような野の花はみつからなくても。



葉っぱ、時々花

co 富田亜希

テーマが花となれば、花でない「花」を探したくなるのは私が天邪鬼（あまのじゃく）だからだろうか。

葉っぱだけれど、花に見えるものがある。

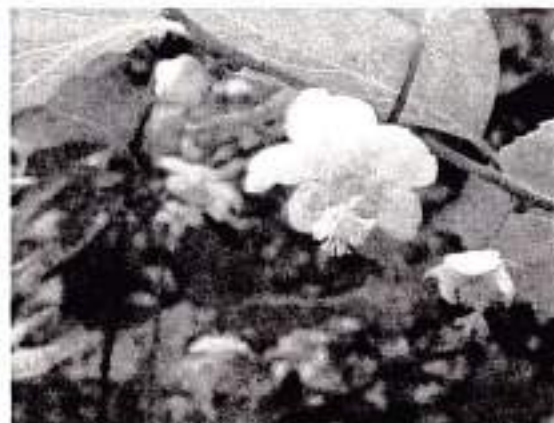
マタタビだ。この春から初夏にかけて、箕面 VC、ちはや園地、白山と色々な場所で遭遇した。林の縁が点々と白く、何かの花が咲いているのかと近くに寄れば実はマタタビの葉だったという驚きは、何度体験しても新鮮だ。繰り返していると、ははあ、またマタタビだなと分かってくる。（話はズレるが、同じ植物の同じ状態を時間差で見るのは、緯度と標高と地球の大きさが体感できてとても好きだ。）

マタタビは花の時期に葉の表面の一部が白色になる。そうやって虫をおびき寄せ、受粉してもらっているらしい（「らしい」がつくとのこと）。花自体は10円玉大で、枝の下側にぶら下がっている。花を枝の上にかんばって持ち上げ、重たい実も掲げる労力は相当なものだろう。花を表に出して目立たせるのではなく、葉を代わりに使うという戦略にはうならされる。

葉が白化する植物は、ハンゲショウ（半夏生）の方が有名かもしれない。花のすぐ近くの葉が白化しているので、マタタビよりも花弁らしい葉だ。残念ながら実物にお目にかかったことはないが。ちなみに葉の白化は、葉の表面と葉緑素の入っている細胞の間に空気が入り、それが白く反射して見えるのが理由とのこと。ハモグリバエの幼虫が、育てた野菜の葉っぱの表側の葉肉を食い散らかし、白いグネグネ文字が浮き上がるのとは少し違うようだ。

ほんの数日前、近所の店先の観葉植物の異変に気がついた。いつもは青々と茂る常緑樹だ。ところどころ、斑入りどころでない真っ白の小さな葉が、枝先に固まってついていたのだ。病気かなと思い、よくよく見てみると、その葉の付け根あたりにナンテンに似た実があった。つまり、白い葉の下に、花が受粉した結果できた果実がついているのだ。その時、頭を過ぎったのは、マタタビの白い葉とその下に咲く花だった。マタタビと同じように、この樹も白い葉で虫を呼び寄せているのかもしれないと胸が高鳴った。

一つのきっかけが、次の疑問と好奇心を生み出す。それが網の目のように広がっていく感動と楽しさを味わい続けたい。



マタタビの花（両性花）

編集後記

あかん！ なんか忙しくて
今回原稿を書き遅らせた…
いけまへんねえ 次回はその全盛期でした。

初参加 何いともや、てめえなくしゃ
わからぬ！ 大変さを楽しみも！

Teru Yabu

花… たいすきな「花」 BOSS

今回は一投稿という形にしてみました。
ちよと薄めな冊子にしてみました。
いろんな視点を感じてもらえる内容になっていると
思います。みなさまありがとうございます。
これからもIPWS. 続けていきます。

(こころこころ)



2009. 8. 20 発行